返り花

火野葦平著

返り花

火野葦平

主婦之友社

返り花

火野葦平

（装釘・挿絵）　岩田専太郎

太鼓祇園

「お父さんの出番は、何時ごろになるのかしら？」

「きつと、夕方でしよ、名人なんだから」

「大丈夫かなあ？　去年も、だいぶん、もう、腰前があやしかつたわ。太鼓たたき、つて、重労働ね。若い人たちだつて、汗、ぶるんぶるん、かいてやつてるんだもん。六十越した老人は、無理よ。去年だつて、お祭がすんだとたんに、寝こんでしまふんだもん」

「でも、八坂神社の総代がきて、どうしても、吉岡さんに出てもらはんことにや、太鼓祇園の恰好がつかないつて、いふのよ。町でも、古くからの正しい太鼓の打ち方、知つてる者が、もう、ゐなくなつたのね。だんだん、減るのよ、老人が死ぬもんだから。……うちのお父さんも、いつか、のこり組の部に、入つてきたんだわ。だから、お父さんは、コンクールには加はらずに、古式の打ちかたを聞かせる組なのよ。真打ち、つてとこね」

「お父さん、あまり無理せん方が、ええけんどなあ。まだ、春からの胸脚気が、すつかり、よくはなつてないんだもん。とんぴんだから、すぐ、おだてに乗つて……」

「今年は、お父さん、どうしても、出たいわけがあるのよ。姉さんには、話さなかつた？　ほら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

今年、還暦でせう？　だから、すこし無理になつても、お祝の意味で、お祭に出たいつて、いふの。そのかはり、今年を、太鼓の打ちどめにする、つて」

「そんな、年寄りの気持、わからなくはないわ。しかたないさ、老人は頑固だから。ことに、うちのお父さんときたら、いつたん、いひだしたこと、ひつこめるやうな人ぢやないんだから」

「その頑固は、吉岡家、一流のお家芸なのね」

「ウフフ……、女の子も、意地つ張りばつか

りでね」

「その第一等が、美代姉さん」

「馬鹿いひなさい。記代ちやん、あんたよ」

仲よく、そんな会話をとりかはしながら、姉妹は、祇園祭で、雑沓をきはめてゐる、魚町筋の目ぬきどほりを、歩いた。歩くといふより、人波にもまれて、ながされてゐるのである。

「無法松の一生」といふ映画で、小倉の太鼓祇園は、ひろく全国に知られるやうになつたが、これは、昔からの由緒ある、独特の祭であつた。祇園は勇壮な夏祭として、全国各地、どこでも、行はれるが、特別に、太鼓祇園とよばれるものは、この小倉をおいて、あまり、きかない。それだけに、その太鼓の打ちかたに、特色があるのである。そこで、例年、八坂神社の祇園奉納として、太鼓打ちのコンクールが行はれる。神社の境内はせまいので、ちかくの勝山公園が、その競技場にあてられるが、この日は、北九州各都市から集まる見物人で、人垣がつくられるのである。

かういふときには、世話人として、吉岡喜助は、審査員をつとめ、最後に、古式の正しい打ちかたを、人々にきかせるのであつた。喜助は、この土地の出身者で、現在は、鳥町で、ちよつとした陶器店をひらいてゐる。表の看板には、㊟の屋号が、大きくかき出してある。

吉岡家は、当主喜助と妻タキヨとの間に、六人の子があつた。喜一郎、登代、喜二郎、美代、

喜三郎、記代――まるで、うちあはせでもしたやうに、男と女とが、交替にできた。面倒なことのきらひな喜助は、町内のごへいかつぎ連中が、姓名学などをもちだして、とやかくいふのには、見むきもせず、

「どうせ、名前なんて、符牒だから」

さういつて、男の子には、みんな、自分の「喜」を頭につけ、長男から順に、喜一郎、喜二郎、喜三郎とした。女の子の方は、母親の「ヨ」をとつて、登代、美代、記代とした。

「お父さんは、簡単坊主ね」

タキヨは、さういつて、ものにこだはらぬ夫、そのために、商売の方も、いつかう、うだつがあがらぬ喜助を、笑つた。儲かることがわかつてゐても、手間がかかつたり、手つづきがこみいつてゐたりすると、

「ええい、もう、やめた」

と、損する方へ、まはるのである。

しかし、子供たちの名には、そんな大ざつぱなつけかたをしたのに、町内のインテリで通つてゐる「春風堂」書店の森大助からは、よい名だ、とほめられた。

その六人のうち、喜二郎が、ビルマで戦死したほか、五人は、健在である。喜二郎は、砲兵伍

長であつたが、あの悽烈をきはめた、インパール作戦の末期に、郷土部隊、小倉百十四聯隊に加はつてゐて、ミッチイナで全滅した。

美代も、タイピストとして、ビルマ派遣軍司令部にゐたが、これは、終戦後、抑留されて、命からがら、ひきあげてきた。

長兄喜一郎は、幼時、右脚を捻挫して手術したあとが、跛になり、兵隊には、とられなかつた。嫁節子をもらひ、現在は、二人の子供がある。家をついで、店をきりまはしてゐる。

長女登代は、福岡市の、佐々木幸吉といふ、古いのれんの博多人形屋に、嫁に行つた。

かうして、㊐陶器店は、さして資産もないながら、まづ、中流の家庭として、平和であつたのだが、じつに、この年の祇園祭を、軸として、急速に、変転の運命のなかに、つきおとされたのである。しかし、このたのしい祝ひの当日、たれが、そんな不吉なことを、予測し得ようか。

美代、記代の姉妹も、はしやいだ気持で、おしやへりしながら、祭の人ごみのなかを、たのしけに、うろついてゐるのだつた。

「マルヨシのお嬢さん、まあ、おはいり」

いたるところで、声をかけられた。

「やあ、九谷焼さんに、有田焼さん、おそろひで」

などと、笑つて、いふ者もあつた。そんなことをいふのは、もう祭酒に酔つてゐる連中だつた。吉岡家が瀬戸物店なので、地味な美代の方を有田焼、派手な記代の方を、九谷焼などと、こころやすだてに、呼んでゐるのだつた。それは、ほめてゐるのか、くさしてゐるのか、わからなかつたが、どこか、ぴつたりと、二人の性格をいひあててゐるところがあつた。

「みなさん、よいお機嫌で」

と、姉妹も、愛嬌をふりまいた。

各町内には、いづれも、一つづつ山車がつくられ、そのうへに、大太鼓が積まれてあつた。道路においてあるところもあれば、店の中でひろいところは、それがひきこまれて、しきりに、打ち鳴らされてゐた。小倉の街中に、数十の太鼓のとどろきが、ひびきわたつて、勇壮の気が、みちみちてゐた。

「JOSKで、お父さんの古式太鼓を、録音するのね」

「さうでもして、残しておかなきや、老人が死んでしまつたら、すたれてしまふからでせう。去年は、現地放送だけだつたけど、今年は、それを、録音して、永久にのこすつて、いふんで、あののんき坊主のお父さんが、大はりきりよ。なんども、練習やつてたわ」

「チキリ屋の御隠居さんと、二人なんですつて」

「さうお？　あんな、よぼよぼの、腰まがりの爺さんに、あの勇しい太鼓打てるの？」
「打てるのよ。大太鼓のまへに立つて、二本の撥をもつたら、ぴいんと、腰がのびるんですつて」
「芸、……つて、そんなものね」
記代は、さういつて、ためいきをつくやうに、群衆のなかで、なにか、遠い眼をした。
（春之助さんも、早く、その芸の奥義をきはめてくれると、いいんだけど……）
と、恋人のことを、考へた。
「一人前になるまでは、絶対に、妻帯を許さぬ」
時代が変つても、封建的な厳格さをもつてゐる有田焼陶工の師匠、赤尾清兵衛は、弟子の加川春之助を、そんなきびしい言葉で、しばりつけてゐた。春之助は、弟子のうちでは、俊秀であつたが、師匠は、叱言をいふばかりで、褒めるといふことがなかつた。それどころか、
「未熟者奴が。なんべん、いうたら、わかつとか」
と、日に、四五度は、がみつけるのだつた。かういふ調子では、いつ、一人前になれるのか、芸の奥義をきはめることができるのか、こころぼそい話である。このことは、記代にとつては、重大問題だ。師匠が、春之助にたいして、一人前になるまで、結婚をゆるさぬといつてゐるとすれば、何年でも、何十年でも、一人前になるのを、待たねば、ならぬのだらうか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

地方の商家としては、結婚の早い昔からのならはしで、もう、美代にも、記代にも、いくつも、縁談があつた。そして、最近、美代の方は、ほぼ、きまり、記代の方に、商工会議所議員を通じての、のつぴきならぬ縁談が、きてゐるのだつた。春之助とのことは、両親にかくしてゐることで、記代は、気が気ではなかつた。

（春之助さんは、いつたい、どんな気持で、ゐなさるのだらうか？）

切迫した思ひで、それが、知りたかつた。

「祇園太鼓のコンクールが、はじまつたぞう」

と、ふれて歩く者があつた。

競技場たる勝山公園は、群衆にうづめられ、その円陣のなかから、選手たちによつて打ちだされる勇しい太鼓の音が、高くひくく、ゆるく早く、よく晴れあがつた七月の青空の奥までも、とどろきのぼつて行つた。しきりに、花火がうちあげられ、爽快な音とともに、中天で、はじけてひらいた五色のパラシュートが、花びらのやうに、祭にさんざめく群衆のうへに、降つてきた。

花の運命

美代と記代とは、太鼓競技の方には、父の出るころ、行つてみるつもりだつたので、魚町の雑

杏をぬけ、電車通りをよこぎると、鳥町の食べもの小路のなかに、はいりこんで行つた。
「記代ちゃん、なんにする？」
「姉さんは？」
「そば、にしようか」
「うん、いいわ」
どこかで、腹ごしらへをしようといふ算段である。祭は、食欲をそそるものである。
しるこ屋、お好み焼屋、すしや、一品料理屋、喫茶店、菓子屋、トンカツ屋、などが、一間とはないせまい道路をはさんでゐる。この小路も、人の渦である。どの店も、満員だ。
「田舎庵」といふのれんをくぐつて、姉妹は、なかに入つた。そこも、いつぱいだつたが、
「これは、マルヨシお嬢ちやん、どうぞ、こつちに」
と、よく顔を知つてゐる女将が、台所のちかくのところへ、席をつくつてくれた。
「たいへんですわねえ」
「お祭騒ぎつて、このことかね」
と、気さくな女将は、ぽてぽてした白い顔を、いつぱいに、ほころばせて、笑つた。
「大儲けね」

「御冗談ばつかり。忙しいだけですよ」
客の間に、わりこむやうにして、坐り、ざるそばを、三つ、註文した。美代は一つだが、記代の方は、二つないと足りないのである。
小女を指揮しながら、縦横無尽の活躍をしてゐる女将も、ときどき二人のところによつてきて、
「美代さんのお花、すばらしいね。井筒屋で、見せてもらひましたよ」
と、感にたへた語調で、いつた。
「だめですわ」
「あんたの花だけが、ならんだ花から、ぽおんと抜けて、光つとつたよ。あれ、ええな。白磁丸水盤に、ポンポン・ダリヤ、夏菊、ぎぼし、本勝手の直立体で、美しかつた。うちの娘のなんか、なまじ、美代さんのすぐ傍にあつたんで、見ちやをれん」
「小母さん、あんなことばつかり。里子さんの、よかつたわ。車百合、夏櫨、しだ、この三つを使つたの、ほかにもあつたけど、断然、里子さんのが、群をぬいてたわ。あの、小母さんとこの家宝だといふ、南蛮の丸水盤も、よかつたのね。でも、本勝手の傾斜体で、あんなに、近景描写のうつくしい感じ、さう、誰もには、出せないわ」
「娘のを、ほめて下さつてありがたう。あんただけよ、ほめてくれるのは。里子に、さういうと

きますよ。よろこぶでせうけん。お礼に、だしでも、特別においしくしてあげるかな」
井筒屋デパートの五階で、祇園生花展覧会がひらかれ、各流の作品が、妍を競つて、ならべられてあるのだつた。美代は、小さい時分から、師匠について、小原流を習ひ、この地方でも、その名を知られてゐた。
ざるそばがくると、食べながら、
「姉さん、もう、藤木さんの方、すつかり、きまつたの?」
「きまつたのよ。明日、仲介の八代さんを入れて、うちに、藤木さんを招待ずるんだつて」
「検事、つて、ちよつと、怕いな」
「でも、やさしい、思ひやりぶかい、もののわかつた人だつて、八代さんは、すつかり惚れこんでるのよ。あたしも、二三回、お逢ひして、お話してみて、決心したわ」
「姉さんが、自分で、そのおつもりなら、いふことないわ。幸福を祈るわ。……へえ、藤木鬼検事が、あたしの兄さんになるのか」
そんないひかたに、姉妹は顔見あはせて笑つたが、美代の顔には、どこかに、苦しげな愁ひのいろがあつた。そんなに、すすんで嫁くといふはずみはなく、ただ、静けさを求め、世間なみな落ちつきのなかに、身をおきたいといふ願ひだけが強かつたのである。もう、男と女との問題に

ついて、嘗てのやうな修羅に、ひきこまれたくはなかつた。強烈な恋愛の情熱は、昔のこととして、早く、平凡な家庭の夫人になつてしまひたかつた。一切の過去の思ひ出を、忘却の河のなかに、投げすてて。

（それが、女の幸福といふものだわ）

そんな風に、たわいもなく考へてしまふことが、救ひだと思つた。どうせ、「幸福」などといふものは、主観的なものであるとすれば、どんな環境のなかにあつても、努力ひとつで、「幸福」といふものを、つくりあげることが、できる筈だ。美代は、さう思つて、外部の条件にたいしては、あれこれと、贅沢な考へをいだくことを、やめたのだつた。

検察庁で、少壮の手腕家として、その名を謳はれてゐる藤木検事——はじめ、商工会議所議員で、パン屋をしてゐる八代竹二郎から、話があつたとき、ちよつと、いかつい感じで、尻ごみする気持がなくもなかつた。しかし、要するに、自分が夫とするのは、職業ではなくて人間であると思ひ、その人のことをよく聞き、自分も逢つて、結婚の決意をしたのだつた。さうときまつて、式をあげ、藤木の家に行つたならば、すなほなよい妻として、夫を助けたい、と考へてゐた。

（もう、荒々しいことは、一切、ごめんだわ）

荒々しいこと——胸に黒くこびりついた戦場でのこと。それを思ふと、

（早く、藤木さんのところに、嫁きたい）

そんな、あわてた気持にも、なつてくるのだつた。女だてらに、志願して、ビルマにわたつた、そんな、戦火のなかの嘗ての自分を、まつたくの他人と考へたかつた。

「吉岡の美代さんなら、よい女房になつてくれさうにある」

さう、藤木信雄が、仲介の八代にいつたときき、安堵して、藤木に、もたれかかりたいとさへ思つた。

「記代ちやんの方は、どうなの？」

美代が、さうきくと、

「困つちやふわ」

と、記代は、かくしだてもなく、渋面をつくつた。

長顔と丸顔で、ちよつとみると、姉妹のやうではないが、どちらも色が白く、一重瞼の眼と、やや、うけ唇の口もとが、共通してゐる。内向性と外向性との反対な性格が、おなじ一重瞼の瞳のなかにも、あきらかにちがつた光を、みせてゐる。姉は和服を、妹は、ワン・ピースを着てゐた。どちらも祭なので、今日は、一張羅であつた。二人とも、美しい。

「ほんとに、困るわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook